慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	粂川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2011
Jtitle	Booklet Vol.19, (2011.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000019-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

「視」と「触」は仇敵同士のようなものだ。

「見ること」はもっとも明晰かつ高いリアリティをもった感覚として、人間の理性と洞察力の比喩として諸感覚の位階の最上位を占め続けてきた。対するに「触ること」は、なんらのステータスも与えられないところから、つねにそんな視覚の驕りを糾弾する立場にあった。リアリティではなく、「リアル」そのもの。どんなに眼と頭脳が協働して説得力のあるイメージを完成させようとも、「じかに触れる」という経験の直接度は、抜き差しがたいものがあった。「触れる」ことは「感じる」ことそのものであり、感情にまで直接に達する「感じ」の領域本体を形成していた。

18 世紀ドイツの文脈で言うなら、カントが視覚と聴覚を「美を感受する（より高度な）感覚」としたのに対し、ヘルダーは「触覚こそ、もっとも根源的な感覚」であるとし、あらゆるものを生成させると同時に魂に直接働きかける「力」を感じることこそ「触覚」であると主張した。ここでの「視」と「触」の対立は、そのまま近代的な啓蒙思潮とロマン主義的な暗い衝動の関係とパラレルな思想対立でもあった。

カントとヘルダーの両者から多くを学んだゲーテは、この対立を調停する仕事を行なった。ゲーテ自身はいわゆる「眼の人」であり、絵画や図像を思考のモチーフとすることが非常に多かった。にもかかわらず、彼の世界探求は「視る」ことの中に世界のより本質的ななにごとかが象徴的に表現されていると考えたのである。「色彩は、触ることも、味わうこともできる」とまでゲーテは言った。「青い味覚」、「明るい触覚」といった共感覚的な言葉の中に、感覚世界から離れないままでイデア的世界に入っていくことのできる一筋の道を見ていたのだ。

今日われわれには、ゲーテの仕事を引き継ぐことが要請されている。「視」と「触」の間にある世界をさまざまな技術的・芸術的な象徴法の中で捉えることを試みることと、哲学的考察によって「感覚から離れず、感覚にしばられない」世界観の再構築、およびそれに基づいた社会運営が求められているのだ。いわゆる健常者と障害者の生活空間を仲介するということももちろん重要な課題だが、ことはそこにとどまらない。あらゆる知覚がバーチャルな次元と結びつかざるを得ない現状にあって、われわれが自分たちにとっての「現実」をどこに置くか、情報化・バーチャル化する世界の中で感情を持つ存在としてどのように生きていけばいいのか、という本質的な問いに取り込むことが求められ

ているのだ。

小冊子ながら上記のような射程をもった本特集には、さまざまな領域の一線で活動する方々からのご寄稿をいただいた。岡原正幸氏は感情社会学と障害学の立場から理論と実践の両面で活躍する社会学者である。西村陽平氏は視覚障害を持つ人々とともに「手でみる」触覚芸術に取り組んでいるアーティストだが、本巻では自作を題材に視覚と触覚の関係について考察してくれた。「視覚障害者」が彫刻を楽しむことのできるギャラリー TOM 副館長を務める岩崎清氏は、今回は北斎の浮世絵に「触れる」ことについて論じている。熊倉敬聡氏は社会の中での芸術の役割に関して新たな視点を提示し続け、様々な実践にも取り組んでいるが、今回は瞑想という観点から感覚の問題にアプローチしている。稲見昌彦氏は「透明人間」を工学的に実現したことでも知られるが、ここでは古川正紘氏とともに人間の皮膚感覚における「毛」の働きについて詳細に論じている。前野隆司氏・仲谷正史氏・筧康明氏・白土寛和氏は、インターフェイスとしての機械装置による「新たな触覚」の創出とそれがこれからの社会と人の心に何をもたらしうるかを提示してくれた。力作の論文が揃い、本企画の目標は期待以上に達せられたと信じる。編集委員会より執筆者諸氏に感謝申し上げる。

慶應義塾大学アート・センター所員　編集委員　粂川麻里生